

学び つながり 創り出す 子ども

～「きく」を大切に、安心して表現できる学級づくり～

○平成 29 年 8 月 31 日（木） 八頭町立船岡小学校

○アドバイザー 教育実践研究家 菊池 省三 先生

1 菊池先生による示範授業

「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざし、子どもが成長する授業づくり

- ① 教師の子どもを「見る目」のあり方
- ② 個の確立を促す指導のあり方
- ③ 集団を育てる指導のあり方

(1) 示範授業 5年 6年生になるころには何色の自分になっているだろう

○主な学習展開

- ① 「一期一会」の言葉の意味を全体で共有する。
- ② 1年間の主な行事（始業式、2学期始業式、修了式）を挙げながら、「心の色」とその理由を書く。
- ③ 次にどんな質問を聞くか予想させながら進める。
- ④ 「きのうと〇〇〇はよくにているけれどおなじではない。そして、〇〇はいつでも□□」に当てはまるひらがなをノートに書き、意見交換する。→一人一人発表
 - ・黒板の左端（1/5程度）に、「やる気の姿勢」「勢い」「しゃべる 質問する 説明する」「自分から」などの態度目標を可視化し、子どもたちをほめることで学習規律を示されていた。
 - ・相手にどのように伝えようとしていたか、たとえしどろもどろでも自分なりの言葉で表現しようとしていたかなどの視点で子どもたちをほめ、価値づける（拍手など）ことで子ども同士の関係性を豊かにし学ぼうとする意欲が高まっていく。
 - ・ペアや自由に立ち歩いて意見交換するなど対話の経験を重視されていた。
 - ・口角を上げ笑顔で話す、笑顔で友達に答えることで、子ども同士のつながりがより強まる。
 - ・集団に目を向け、子ども同士の「横」のつながりを強める2学期。あらためてゴールイメージを持ち、子どもたちの成長を信じるが必要と感じさせられた授業であった。

(2) 示範授業 3年 さかなやのおっちゃん

○主な学習展開

- ① 菊池先生の紹介
- ② 詩「さかなやのおっちゃん」の第一連を音読する。
- ③ この詩を切るとしたらどこできるか、①～④で挙手。理由をノートに書き、意見交流をする。
- ④ 第二連で気づいたことを、自由に立って意見交換。
- ④ 第三連の最後の言葉の読む強さについて考える。
 - ・音読のとき、声を出させるために、「出る声→出せる声」と短い言葉で教師の意図する言葉を黒板に示すこ

とで、子どもたちは自然と学び変化していく。

- ・指名発表ではなく、列指名や書いた人は立つようにし発表。友だちの考えの1つひとつに、教室中が拍手に包まれた。
- ・支援を要する子が、自分の思いを懸命に書いている姿を見逃すことなく、「一生懸命考えているんだよね」と授業の中に参加していくことの大切さを示している。
- ・ペアやフリートークで対話をするとき、「一人を作らない」「自分から動く」と目標を黒板に示し、進んで離れた席の子のところまで行って対話を楽しんでいる子をほめ、学級集団として学ぶ楽しさを自然と身につけていく。

(3) 示範授業 2年 言葉には意味がある

○主な学習展開

- ①「おはようございます」は何文字あるでしょう。
 - ② 9文字の中で1文字はっきり言った方がいい文字はどれかな。
 - ③「おはようございます」をどこで区切るとよいか班で考え発表する。
 - ⑤ □の中に入る言葉を考える。(チョークリレー)
 - ⑥ □の数を増やしていく。(レベルアップ)
- ・「おはようございます」から始まり、□にあてはまる言葉から、最後はスーパーヒーローと結びつけ、言葉には意味があることに気づかせ、「みんな仲間、協力してがんばろう」で授業を締めくくった。
 - ・「スピード」「音を消す」「やる気のしせい」などの態度目標を黒板に示すことで、子どもたちは学習規律を自然と身につけていく。
 - ・「みんなの得意のスピードを見せてね」「正解したらイエーイ、間違ったらイエーイ」「やる気がすばらしい」などのほめ言葉やユーモアを交えながら、メリハリのある授業であった。
 - ・チョークリレーを取り入れながら、子どもたちはみんなとつながる心地よさを実感したようだ。

2 菊池先生による講話

<前半：本校職員のみで質問など>

○子どもたちがつながり合えないことについて

- ・子どもたちがつながるためには、相手のことを知ることである。知れば嫌いにならない。授業の中で、どうつないであげるかは大切なポイント。指名発言は正答を言わせることにつながる傾向があるため、あまり取り入れなかった。抵抗感のある子は失敗経験があるため、子どもには失敗感を与えないような配慮が必要で、そこがスタートと考える。

○全体的におとなしい学級の子どもたち同士が分かりあうポイントについて

- ・コミュニケーションはキャッチボールの楽しさがある。授業に学習ゲーム的なものを取り入れていくこと。これは、どの学年でも同じこと。発言がうまくできない子どもが、話をできる機会もあったほうがよい。
- 今日はスピードのことなどほめていただいた。ほめるポイントが新鮮だった。どのようなポイントでほめるのか。

- ・これまで見てきたクラスの中には、遅くて堅い声かけに答えられないクラスがある(勉強はできるのに)。そうならないように、体と口が動く教室づくりに努めてきた。例えば、「やる気の姿勢」「切り替え」「スピード」などは、黒板の1/5に書き示している。

<後半：修立小学校の先生方と一緒に>

- ・子どもたちを育てることでお給料をいただいている。外国にルーツのある子、貧困の問題を抱える子などあるが、その一人一人を育てあげるのが、一人も見捨てない成長させるのだという教師の覚悟、あとゴー

ルイメージ、見通しをもちながら、常に修正を加えていくこと。そして、個と集団とのバランスが。重要なのは①対話議論の経験。②誰かに提案する経験。③みんなを巻き込んで活動する経験である。

- ・言えない子についても、頑張って悩んでいたところはほめてあげたい。マンネリになるのは、子どもを見る目が育っていない、つまり担任の見る目が育っていないことになる。初期段階として非言語のところ（例：手振り身振りで話している、笑顔で話している、ペアやグループになるとき一人の子をつくらないなど）を取り上げて、ほめることが大切と考える。
- ・「一人が美しい 一人をつくらない」大袈裟に言えば、教育基本法の第1条と2条にあたりと考えることができる。45分間の授業の中にもあるはずだ。
- ・子どもたちはほめられるために学校に来ている」と有田先生は言われた。それを見つけられる教師の感性を。

※資料『菊池省三は考える「授業観」試案』をもとに講話を受けた。

3 今後を活かしたいこと

- ・教師の子どもたちへの想いや熱意を忘れることなく大切にしていきたい。
- ・学級には、家庭に問題を抱えている子、目立たないようにしておとなしくしている子、自分の思いを言えない子など様々な問題や課題を抱えている子どものでこぼこを、まず教師が認めること。そのことが安心できる学級となるであろう。「一人が美しい」「一人をつくらない」「一人も見捨てない」というようなことが重要であると学んだ。
- ・一人ひとりのよさ（一人ひとりの違い）を認め、子どもたちを集団として高めていく必要がある。子どもたちに「一人ひとりが違うんだ」と気づかせ、言葉を通してお互い深く知る場面を授業の中に取り入れたい。そして、きちんと意見を出し合うことで、子ども同士がお互い認め合うことで、さらに学級を集団に変えていきたい。
- ・対話的な学びが成立する教室にするために、子どもの些細な行動を見逃さず、価値づけをし、学級全体の場に共有し、安心できる学級づくりに力を入れ子どもたちを成長させていきたい。
- ・子どもたちをやる気にさせて、授業を一緒につくる“空気”を生み出すことが大切だと感じた。○×を選ばしたり、手を挙げさせたり、列ごとに発表させたり、ペアやグループで話し合わせたり、一人ひとりが参加者になる活動を意識するとともに、友達の意見を聞き合う、一緒に学び合う温かい“空気”を作り出すことも大切なことだと改めて感じた。
- ・「主体的・対話的で深い学び」を実現していくために、子どもたちにどう向き合えばよいのかと考え、子どもを変えようとする前に教師が変わることにも努めなければならないと思う。教師が授業の中で子ども同士の関係性を豊かにし、コミュニケーションを大切にしながら子どもの成長を促していきたい。今後、子どもたちが本気で話し合いができる学級をどのようにつくればよいか、安心して表現できる学級づくりの方向性を示唆していただいた。